

定家の「面白様」の本質

佐藤茂樹

『定家十体』はその真偽が定かではない書である。真作説に従って考えてきたが、偽書説、存疑説も有力ではある。近年も今井明氏⁽²⁾がその偽書性を展開しておられる。今、この真偽に関しての準備も考えもないので、本稿では『定家十体』の「面白様」の例歌を対象としてその本質を考えることとする。その上で、今後、定家の歌合判詞の考察と比べ、その内容をもととして真偽の問題を考えて行きたいと思っている。

「面白様」はその名が示すように、「おもしろし」によって規定される歌の姿であると思われる。即ち、『和歌大辞典』が記すように「一首の趣向の上で、全体としていかにも気の利いていると思われる詠みぶり」と、一般的には考えられているようである。その他、特色ある論として、手崎政男氏は、「面白様」は「風雅の世界に遊ぶ人生態度を、

率直に表現している……観念的芸術の世界を単に憧憬するのみでなく、自身の生活自体をも芸術化しようとしている態度である。いわば芸術の実践である」と言われている。⁽⁴⁾前田妙子氏は「面白」には美の認識と同時に「面白」をそのまま批評としてうけとれる」として、「『おもしろ』は批評の美」と言われている。又、西行を「面白様」の歌人として認め、その歌風の上から、「面白」は『滑稽』でも『笑ひ』でも『譬喩的機知』でもなくなり、人生寂寞、万物凋落を聲の限り批評した歌に外ならない。」⁽⁵⁾と言われている。

又、武田元治氏は、「おもしろし」の内容を定家までの歌論、判詞の例を考察されて次のように説明されている。

基本的には、歌の趣向が巧みで目新しく興趣の感じられる場合に用いられていると考えて、ほぼ誤りはない

ように思う。ただ、俊成・定家の用例になると、以前とは違い、趣向がそれ自体表立つような単なる知的趣向に終ることなく、一首の特質に深く結びついている場合に「面白し」とする傾向が認められた。⁽⁶⁾

やはり、趣向が巧みで興味のある歌と考えておられる。ところで、こうした興味あるという判断は、やや漠然としており、それだけに直観的、恣意的判断に依るように思われる。そこで、本稿では趣向のあり方について考察し、「面白様」の判断に客観的視座を得ようとするものである。例歌の三十二首を対象とし、内容ごとに五首ずつ例歌の順序に従って取り上げ、その他は簡略に述べることにする。

一

(1)山里にあからさまなる都人さびしと思ふ住みうか
らぬを 慈 円

(2)やまざとにうき世いとほむ友もがなくやしくすぎし
昔かたらむ 西行法師

(3)高円の野路のしのはら末さわぎそよやこからし今日
ふきぬなり 基 俊

(4)みやこにて月をあはれと思ひしは数にもあらぬすさ
びなりけり 西行法師

(5)山かげにすまぬ心はいかなれやをしまれて入る月も
ある世に 西行法師

(1)の例歌は「面白様」を知的内容を主とした分類と見る時、まさに典型的な気の利いた趣向を有する、理智的傾向の強い歌と言える。山里を「さびしと思ふ」と都人の心を想像し、一転して、実際は「住みうからぬを」と表現するくだりは、曲折を伴い知巧的構成のある歌と思わせる。まさに、こうした点に「面白様」としての本質があると考えられるかもしれない。しかし、この発想も全く新しい、類がないものというわけではない。古今・九四四では「山里は物の慄わびき事こそあれ世のうきよりはすみよかりけり」(雑・よみ人しらず)と詠まれており、「山里を愛し」とすることを否定するわけではないが、「山里は(世のうきよりは)すみよかりけり」と歌っている。又、『千載集』ではあるが公任は「うき世をばみねのかすみやへだつらん なほ山ざとはすみよかりけり」(雑・一〇五九)と詠み、端的に「山里はすみよかりけり」と表明している。即ち、「面白様」と判断するものになる趣向は必ずしも目新しい、独創的なものをいうのではないことがわかれると思う。

山里を歌った古今歌七首の内、九四四以外を見ると、
春たてど花もにははぬ山ざとはものうかるねに鶯ぞな

く (春・一四・在原棟梁)

見る人もなき山ざとのさくら花ほかのちりなむのちぞ

さかまし (春・六八・伊勢)

ひぐらしのなく山里のゆふぐれは風よりほかにとふ人

もなし (秋・二〇五・よみ人しらず)

山里は秋こそことにわびしけれしかのなくねにめをさ

ましつ (秋・二二三・ただみね)

山里は冬ぞさびしさまさりける人めも草もかれぬと思

へば (冬・三二五・源宗于朝臣)

白雪のふりてつもれる山ざとはすむ人さへや思ひきゆ

らむ (冬・三二八・壬生忠岑)

であり、「山里」の寂しさ、わびしさを歌っている。又、

山里は『後拾遺』三三四の詞書「山ざとにあらさまにま

かりてはべりけるに……」、同八七八の詞書「わづらひて

山寺にはべりけるころ人のとひてはべりけれどまたもおと

もせずなりにければ」に見られるように、都人にとつては

山里は永住の地ではない。その意味において、この例歌の

初句から第四句までは歌の常識、山里の本意に沿った内容

となっている。そして、その内容を第五句で否定している。

山里を「さびし」とする本意的世界の否定が歌われている。

こうした、本意を否定することに、「面白様」としての趣

向のあり方があるように思われる。又、山里は

とふ人もあらじと思ひし山ざとに花のたよりに人め見

るかな (拾遺・春・五一・もとすけ)

山ざとにしる人もがな郭公なきぬときかばつげにくる

がに (拾遺・夏・九八・つらゆき)

あとたえてとふひともなき山ざとにわれのみみよとさ

けるうのはな(後拾遺・夏・一七一・藤原通宗朝臣)

山里のかひもあるかな郭公今年ぞまたで初音ききつる

(後拾遺・異本歌・一二二九・良暹法師)

やまざとはのべのさわらびもえいづるをりにのみこそ

人はとひけれ (金葉・春・七一・権僧正永縁)

とも詠まれており、わびしいばかりではない。ただ、それ

がわからないのは都人は「あからさまに山里」にいるから

である。本意の否定とは言っても、根柢のない単なる直観

や思いつきではない。個人的感性が関わっていても、歌と

しての理を有している歌なのである。

(2)について、窪田空穂氏は「複雑した心境を、実際に即

することによって、単純に現わしている」(8)。

「西行の心情が率直に表白されている」として注目される。

と言われている。実際に即した率直な表現ではあるが、山

里において友を欲するのは、その寂しさを紛らす、慰める

ためではなくて、「くやしきすぎし昔かたらむ」ためと詠む所に、目新しさとしての「面白さ」を見ることが出来るのかも知れない。しかし、『新古今』ではあるが一七二〇に准喬親王の歌として「夢かともなにか思はむうき世をばそむかざりけん程ぞくやしき」と歌われている。この句の発想は珍しいと言うものではないことがわかると思う。この例歌を本意の面から見ると、山里の寂しさを慰めるために友を求むという本意に対して、悔しく過ぎた昔を語るために友を求むというのであるから、本意の拡大の歌のように思える。しかし、下句は「くやしきすぎし昔」と歌うが、「昔」という詞は古今から最初の五首をあげると、

人はいさ心もしらずふるさとは花ぞ昔のかにほひける
（春・四二・つらゆき）

いろもかもおなじむかしにさくらめど年ふる人ぞあら
たまりける
（春・五七・きのともりのり）

花のごと世のつねならばすぐしてし昔は又もかへりき
なまし
（春・九八・よみ人しらず）

さつきまつ花橘のかをかげば昔の人の袖のかぞする
（夏・一三九・よみ人しらず）

いそのかみふるき宮この郭公声ばかりこそむかしなり
けれ
（夏・一四四・そせい）

である。⁽¹⁰⁾昔は悔しいものではなく、むしろ、懐かしく思い出す、慕わしいものとして詠まれている。即ち、この下句は昔は懐しいものという本意に対する否定が歌われている。この例歌は、上句の本意的世界の歌に対して、下句で新たな本意の詠出があるというよりは、むしろ、上句の本意的世界の詠出に対する理由としての下句に本意の否定が詠まれている歌だと思われる。

窪田空穂氏は、「くやしきすぎし昔」を「ざん悔というような積極的な心でもない、軽い慰めでなくてはならない。慰めとすることは、くやしさを脱離し得て初めてできることである」と説明されている。確かに「うき世」は辛く、嫌うべきものではあるが、実際は、「うき世にはかどさせりとも見えなくなるとわが身のいでがてにする」（古今・雑・九六四・平さだふん）、「をしからでかなしき物は身なりけりうき世そむかん方をしらねば」（後撰・雑・一一八九・つらゆき）の如く、背くことの出来難いものである。即ち、「うき世をそむいた人」において初めて昔を「くやし」と思える境地に達するのである。だからこそ、西行は「うき世をそむいた「友」を求め、「くやしきすぎし昔」をともに語ろうとしたのである。この例歌は「やまざとにうき世いとはむ友もがな」という願いの中に、世をそむいた

人だから、昔をくやししく思うという理を有しているのである。

(3)の例歌は晩秋の頃の木枯しの初風に気づいた心を歌っている。久保田淳氏は「主として第四句の擬音語などの使い方に面白さを認めたものであろう」と言われている。擬音語を用いた歌として、「幽玄様」に「ささの葉はみ山もそよとみだるめり我は妹思ふ別れきぬれば」(人丸)がある。幽玄様例歌は「そよとみだるめり」と詞続きが素直なものに対して、面白様例歌は「そよやこがらし」と続き詞続きに曲折がある。こうした点に面白さを見るとすると、「面白様」における趣向とは必ずしも全体的なものではないことになる。

この例歌は単なる眼前に展開する晩秋の景ではない。歌枕として名高い「高円」の地を詠んでいる。この大和の歌枕を片桐洋一氏は次のように説明されている。

『万葉集』の影響が如実に現われた平安時代後期以降によくよまれ……すでに万葉歌によまれていた素材を継承したもので、万葉風を感じさせる歌枕として用いられたのである。⁽¹⁾

『万葉集』から五首取り上げると、
かすがのに しぐれふるみゆ あすよりは もみぢか

ざさん たかまとのやま

(雑・一五七五・藤原朝臣八束)

たかまとの のへのあきはぎ このころの あかとき
つゆに さきにけむかも

(雑・一六〇九・大伴宿祢家持)

たかまとの あきのうへの なでしこのはな うら
わかみ ひとのかざししなでしこ

(相聞・一六一四・丹生女王)

はるかすみ たなびくけふの ゆふづくよ きよくて
ららむ たかまとののに

(一八七八)

みやひとの そでつけごろも あきはぎに にはひよ
ろしき たかまとのみや(四三三九・大伴宿祢家持)

で、これらが、『万葉集』における高円のイメージを形成している歌だと思われる。これらは、わびしさではなく、むしろ、華憐さ、華やかさ、匂ひやかさを歌っており、寂しい情感は乏しい。即ち、この例歌は高円のもつイメージとは逆の哀感を歌っている。その意味では、この例歌は高円の本意と逆の世界を歌っているのである。

(4)の例歌は、山里の月と都の月とを比較するという詠み方に知的な構想を読みとり、「面白様」の例歌とされるのかもしれないが、山里から都を、都から山里を連想すると

いう発想は目新しいものではない。

み山には松の雪だにきえなくに宮こはのべのわかかつ
みけり (古今・春・一九・よみ人しらす)
神さびてふりにし里にすむ人は都にほふ花をだに見
ず (後撰・春・一一六・よみ人しらす)

宮こにてめづらしと見るはつ雪はよしのの山にふりや
しぬらん (拾遺・冬・二四三・源景明)

こうした歌があるのである。むしろ、この例歌は西行らしい実感に即したものと考えて良いと思う。「みやこにて月をあはれと思ひし」とはまさに、月をあはれなものだとして詠み続けられてきた和歌の伝統を受け継ぐものであり、月の本意が詠まれていると言つてよい。しかし、こうした月も旅路で見る月に比べると慰みのようなものでしかなかつたと表明する時、上句の内容は否定されることになる。即ち、一首は本意の否定が詠まれていると考えられるのである。

(5)の例歌について、窪田空穂氏は、この例歌において月を詠出することは、「やや突飛な感がなくはないが」と言われている。こうした点に、著想としての面白さが認められるのかもしれない。上句の「山かけにすまぬ心はいかなれや」に、西行の自負心がうかがえ、貴族達への劣等感を

植えつける内容と考える時、「いかなれや」は単なる疑問ではなく、むしろ、揶揄的に隠遁しない人々への批判がうかがえる。即ち、人々には山里を憂きものとして捉えているということを前提として詠まれている。山里を憂きものだとする固定観念にとらわれている人々への嘆きと怒りが込められているのである。こう見る時、「をしまれて入る月もある世に」は上句とのつながりからは飛躍的ではあつても、山里は惜しまれながらも月が入るほどの所であり、決して憂きものではないことを語っているのである。つまり、一首は山里は憂きものという本意の逆を歌っているのである。

その他、こうした本意の逆、及び否定を歌う歌として次のような歌があげられる。

(6) 檣の板も苔むすばかりなりにけり幾世やへぬるせた
の長橋 匡房

(7) いかにせむしづがそのふのおくの竹かきこもるとも
世の中ぞかし 俊成卿

(8) みせばやなを鳥のあまの袖だにもぬれにぞぬれし色
はかはらず 殷富門院大輔

(9) なき名のみたつの市とはさわげどもいさはた人をう
るよしもなし (「まだ」新古今) 人丸

(10) いまぞしる思ひいでよとちぎりしは忘れむとての情
なりけり 西行法師

(6)の例歌の槿は「みくら山ま木のやたててすむたみはとしをつむともくちじとぞ思ふ」(千載・雑・一一七四・源俊頼朝臣)と詠まれているように、槿は朽ちることのない木として詠まれている。それに対し、この例歌は朽ちるのではないが、「こけむす」と詠まれている。この内容は「槿」のもつ「立派な木」、朽ちることのない木というイメージの逆の内容となっている。

(7)の例歌は窪田空穂氏が指摘されるように竹林の七賢人を連想させる歌である。この例歌では竹林の七賢人をイメージさせながら、「かきこもるとも」と逆転させることによって、次に続く「世の中ぞかし」と結びつき、自然な流れとなっている。しかし、竹林の七賢人から働く連想はやはり、高踏的なものである。しかし、この例歌は竹林の七賢人のイメージとは逆の閑居の嘆きが歌われている。

(8)の例歌の感動の中心は下句の「ぬれにぞぬれし色はかはらず」である。第四句から連想されるものは、涙により袖が朽ちたり、紅涙に変わったたりすることである。

紅のふりいでつつなく涙にはたもとのみこそ色まさり
けれ
(古今・恋・五九八・つらゆき)

白玉と見えし涙も年ふればから紅にうつろひにけり
(古今・恋・五九九・つらゆき)

ちの涙おちてぞたぎつ白河は君が世までの名にこそ有
りけれ (古今・哀傷・八二九・そせい法し)

の如く、涙を流し続けることによって、涙は血の涙と変わるののである。しかし、この例歌は、自分の嘆きの深さを強調するための比較のためではあるが、「ぬれにぞぬれし色はかはらず」と表現している。即ち、甚だしく泣くことにより涙が血の涙と変わるといふ、一般的発想の否定が詠まれているのである。

(9)の例歌の「思ひいでよ」には相手の深い情愛の表れと理解される。しかし、この例歌にあつては、それは「忘れよう」という冷たい心の表れであつたのだと歌う。ここには、「思ひいづ」という詞のもつイメージとは逆の内容が詠まれていることになる。⁽¹³⁾

以上の如く、これらの十首には本意もしくは、詞のもつイメージの逆の内容、もしくは否定が詠まれている歌である。「面白様」の興趣とは、こうした常識をくつがえした逆転的発想、及びその表現の中にある真実に対して感得されるものと思う。

(1) うかりける人をはつせの山おろしよはげしかれとは
祈らぬものを 俊 頼

(2) 庭の雪にわが跡つけて出でつるをとはれにけりと人
や見るらむ 慈 円

(3) やよしげれ物思ふ袖新古今のなかりせば木の葉の後は何を
そめまし 慈 円

(4) 人すまぬ不破の関屋の板びさしあれにし後はただ秋
の風 後京極

(5) 難波がた汐干にあさる蘆たづも月かたぶけば聲の恨
むる 俊恵法師

(1)の例歌における「はつせの山」は片桐洋一氏が前掲書
において言われるように「全くユニークである」と思われ
る。

初瀬の用い方からすると、斬新な、そして構想も複雑で、
その知巧性に「面白様」としての要素を見ることが出来る
かもしれない。ただ、この歌は、冷淡な人がなびくように
と祈ったが逆効果だったと理由づけに終始しているだけの
歌ではない。この「はげしかれとは祈らぬものを」という
句には、本来の願い、つれない人が冷淡でなくなるように

一心に祈ったのだという作者の純粹な思いがこめられてい
るのである。むしろ、この痛切な思いにこそ中心的感動が
ある。表現そのものではなく、その表現の裏に感動をこめ
るような間接的な表現がこの例歌にはあるのである。

(2)の例歌に関して、久保田淳氏は「自らの行為を『問は
れにけりと人や見るらむ』と考える。興じてみる」と説明
されている。こうした「一興」⁽¹⁴⁾に「面白様」を見ることが
出来るかもしれない。現象として「庭の雪の上に足跡」
がある。事実は「わが足跡」であるが、それを「とはれに
けりと人や見るらむ」と歌う。この「とはれにけり」とい
う発想には、作者の孤独の認識とともに「訪問されたい」
という願望が感じ取れる。「とはれにけり」という一興と
も思える表現の中に、「誰からも訪問されることのない私
だからこそ、この私の足跡を他人の足跡と見たい、見て欲
しいと思うのだ」という真実がこめられているのである。
直接的に自分の思いを歌うのではなく、逆の内容を歌うこ
とによって感動を表現の裏にこめる屈折した表現がなされ
ているのである。歌の形象の背後に真実が隠されている歌
だと言って良いと思う。

(3)の例歌に関して、塩井正男氏は「幼なげに時雨によび
かけてこのわが袖がなかりせば何を染むるかと尋ねたる意

匠にて⁽¹⁵⁾と考察され、久保田淳氏は「憂いをもたらず時雨に親しみを感ずるあまり、これを人のように見立てて、

『わたしの袖があるから、お前もまだ仕事が残っているのだらう』と、わざと恩着せがましく言っているのである」と言われている。こうした読み知的構成力を見て「面白様」と理解されるのかもしれない。ただ、この歌はこうした趣向そのものにねらいがあるのではない。塩井正男氏が前掲書において「木の葉散りはてたる後の寂しき情景を言外に寓し得て、いと切なり」と言われるように、寂しき気分を揺曳する一首である。

この例歌は、反実仮想の表現により、時雨が木々を紅葉させたあと、我が袖をも染めてゆくという内容になる。即ち、わが袖は時雨のために紅涙に濡れるという事実を、もしくは予測を詠んでいるのである。この一首は「時雨よ、わたしの袖があるから、お前もまだ仕事が残っているだらうとわざと恩着せがましく言っている」歌ではあるが、こうした反実仮想を用い、時雨に呼びかけ、戯れた体の中に、この紅涙は時雨故であることを暗に明かし、むしろ、このことの方が一首の眼目なのである。一見、戯れた趣向を有す歌であるが、こうした趣向が一首の中心となまっているのではなく、こうした趣向の中に作者の歌の理がひそめられ

ているのである。表現の背後に感動がこめられている歌と言つてよい。

(14)の例歌は廃屋となった不破の関の荒涼とした情景が読まれていた。上句の「人すまぬ不破の関屋の板びさし」という具象的表現のイメージのまま一首が完結されている。ただ、一首の流れの中でやや異質な感のある「ただ秋の風」の象徴的表現効果に「面白様」なるものを認めることが出来るかもしれないが、古今的な知的趣向の表現ではない。むしろ、余情味豊かな歌だと思われる。ものさびしい情景を情趣的に詠んでいる点に「おもしろし」としての興趣を感じ取っているのかもしれない。

「人すまぬ不破の関屋の板びさし」という詞続きは、現実の荒廃の实感を「板びさし」に捉えた具象的表現であるが、「あれにし後はただ秋の風」という結句には「荒廃する以前は」という思いが髣髴される。この例歌は荒廃した現在の不破の関の跡を歌うことによって、逆に、かつての堅固を誇った不破の関への思いが歌われている。現実の不破の関の荒廃の姿の背後に隠された、栄光の不破の関の姿を歌っている。こうした現実のありのままの姿を詠むことによって失われた姿を見ているのである。表現の裏に隠れた真実を浮かびあがらせるような詠み方がなされているの

である。

(15)の例歌に関して、久保田淳氏は「鶴が恨めしげに鳴くのは、餌をあさるべき場所がないからであると考えながらも、あえてそれを、鶴もまた自身同様、月の入るのを惜しんでいるのだと風流に取りなした」、「鶴を月の入るのを惜しむ風雅なものとしてあえて取りなし、その声を『うらむ』といったところが作意である」と言われている。こうした作意を認めて「面白様」と評することが出来るのかも出来ない。しかし、この作意も「恨むる」も、鶴の声をそう聞き取ることは常識となっていたので、合理性のあるものである」と見られるように、珍しいというものではない。久保田淳氏も認められ、窪田空穂氏が言われているように「蘆たづも」の「も」によって、「自身、難波湯の潮干の海辺に、月を愛でており、月の西に傾くのを惜しんだのである」と考えられる。感動を直接、詞として表現するのではなく、作者の感動を表現の裏に潜ませている歌なのである。その他、こうした詠み方の歌には次のようなものがある。

(16)月のいる山(ゆく)新古今に心を送り入れてやみなる跡の身を如何にせむ 西行法師

(17)聞くやいかにはうはの空なる風だにもまつに音するな

らひありとは

宮内卿

(16)の例歌は心は西方浄土にありながら、身はこの濁世にあることへの嘆きを歌っている歌であり、出家後の仏道修行中にふと起こした迷いを歌った歌だと思われる。しかし、「身をいかにせむ」には、窪田空穂氏は「身も心もともに寂滅したいということを余情としたもの」があるとされている。即ち、この「如何にせむ」とは悩みではあっても、全く途方に暮れてしまっているわけではない。むしろ、進むべき道は見えているのである。

又、この例歌は、西方浄土を願い、心は月の入る山にあるが、身は山里にはなく都に留まっていることへの嘆きを歌った、出家前の心境、言い換えれば出家直前の出家の決意に至るまでの苦悩を歌っている歌とも考えられる。こう読む時、やはり「身を如何にせむ」とは途方に暮れている姿ではなく、憧れだけでなく、身も山へという出家への決意が含まれていると思われる。ともに、「如何にせむ」と疑問を發してはいても、単なる素朴な疑問ではなく、その答えを内に有している歌なのである。こうした、実際の感動に即して歌いながらも、その中心的感動を表現の裏に潜ませている歌なのである。

(17)の例歌は「うはの空なる風だにもまつに音するならひ

あり」ということを「聞くやいかに」と問うことによつて、
逢わなくなつた冷淡な男を恨む心を暗に訴えている。さり
げなく詠んだつれない男への非難が痛烈な擲揄となつて響
いてくる。この例歌も詞に表れている。「松は待つものに訪
れるのですよ」という表現よりも、その表現の背後に見
える「あなたはどうかしたのですか」という隠された内容に
こそ中心がある。

以上の如く、これらの例歌は和歌の表現そのものではな
く、その表現の裏に託された心がある。もつて回つたとい
うべき間接的表現、屈接的表現の歌なのである。感動の中
心を直接に詞に表して読むのではなく、それを表現の背後
に潜ませていることに「面白様」として認識される要素が
あると思われる。

二

(18) ほととぎす鳴く五月雨に植ゑし田をかりがねさむみ
秋ぞ暮れぬる 為 政

(19) 秋の夜の衣（は）新古今さむしろかさねても月の光にしくものぞ
なき 経 信

(20) たのめおかむ君も心やなぐさむと帰らむことはいつ
となけれど（なぐさむ）新古今 西行法師

(21) 床ちかしあなかま夜半のきりくす夢にも人の見え
もこそすれ 基 俊

(22) 人はこで風のけしきは（も）新古今ふけぬるにあはれに雁の音づ
れてゆく 西行法師

(18)の例歌は第五句の「秋ぞ暮れぬる」に作者の感慨が込
められてはいるが、上句に夏の景物を下句に秋の景物を対
比的に詠じている。その意味では知的構成のある歌と言っ
て良い。但し、卓抜した趣向というより単純なものと見え
ると思うが、こうした対比的発想の歌が「面白様」の本質
的要素と考えられるかもしれない。この例歌は田をはさん
で上句の「時鳥の鳴く五月雨の頃に植ゑた田」と下句の
「稲を刈り取る頃、その田の上を雁が鳴きわたり秋も暮れ
た」という二つの内容が歌われている。そして、この二つ
の内容はそれぞれが独立した夏の本意、秋の本意を有して
いるのである。即ち、この例歌は二つの本意的世界が詠ま
れているわけであり、加えて、上句は田植之のにぎやかさ
を歌っているのに対し、下句は刈り取った跡の寂寞とした
風景を歌っており相反する感情の内容を有している。

対比的発想の歌としては、この例歌と同趣向の歌として
「きのふこそさなへとりしかいつのまにいなばそよぎて秋
風の吹く」（古今・秋・一七二・よみ人しらず）、「春霞か

すみていにしかりがねは今ぞなくなる秋ぎりのうへに」
〔古今・秋・二一〇・よみ人しらず〕がある。ただ、これらの歌は十体には取られていないので、明確なことは言えないが、対比的な発想を有してはいても、二つの感情内容が近く、相反するものとは言えない点において典型的な「面白様」とは解されなかったように思う。

⑱の例歌は「秋の夜は月の光にしくものぞなき」という一句にその抒情は端的に表われている。秋の月光を賞でるというまさに秋の本意が、直情的に歌われている歌である。ただ、この明快な抒情を表現するのに、「さむしろ」、「しく」という掛詞、及び「さむしろ」と「しく」との縁語とといった技巧がほどこされていて、窪田空穂氏が「掛詞や縁語が、表現をやや騒がしいものにしてゐる憾みがある」と言われているように、こうした技巧性により「面白様」と認められるのかもしれない。

この例歌に言う「秋の夜は寒く、衣とむしろを重ねて着ても、秋の月光に及ぶものはないことだ」という内容には、実感ではあつたとしても、矛盾する二つの内容が歌われている。即ち、秋の月光はすばらしいという月の本意と晩秋の夜は寒いという秋の本意の二つの本意が歌われているのである。やはり、この例歌も秋を賞でる感情内容と、秋を

嘆く感情内容という、相反する二つの本意が歌われているのである。

⑳の例歌は、西行らしい実感に即した、率直な表現が、哀切な響きをもつ歌である。前掲書において、塩井正男氏が言われるように、「例の人情味豊かなる作、無造作にいひ放ちて、情味限りなし」と言える。こうした、無造作な表現にこめられた情意性に、興趣を感じて「面白様」と解されるのかもしれない。上句に対し、下句において「帰らむことはいつとなけれど」と思い返すところに、知性の働きを見ることが出来るかもしれないが、決して、知巧性に富んだ歌ではない。

この例歌は惜別の情を歌っているのであるが、それは上句に十分表われている。「私も心が慰められるし、あなたも慰められるであろうから、再会を約束しましょう」というのは少々理屈っぽいかもしれないが、別れを惜しみ、別れを悲しむのは、去る者も残る者も共通の感情である。

『古今集』の離別歌においても「立ちわかれないなほの山の峰におふる松としきかば今かへりこむ」（三六五・在原行平朝臣）、「すがるなく秋のはきはらあさたちて旅行く人をいつとかまたむ」（三六六・よみ人しらず）の如く、こうした感情は別れの本意と言える。

一方、下句の「帰らむことはいつとなけれど」というこの言葉には、この例歌の場合詞書を見ると修行であるが、旅立ちへの決意が感じられる。残る者を振り捨てて前途を歩むというのも、「しひて行く人」をどめむ桜花いづれを道と迷ふまでちれ」（古今・離別・四〇三・よみ人しらず）、「をしと思ふ心はなくてこのたびはゆく馬にむちをおほせつるかな」（後撰・離別・一三一一）の如く、旅立ちの真実の姿であり、これも、別れの本意と言い得ると思われる。

この例歌は別れに対してもつ、惜別と決別という二つの感情を詠んでいるのである。やはり、この例歌も相反する本意を一首の中に詠み込んでいる歌なのである。

②の例歌を窪田空穂氏は「かしましく啼きしきるこおろぎを罵っている心である。表現技巧に長けている点に特色のある歌である」と言われ、久保田淳氏は「一種の面白い歌というべきではないだろうか」と言われている。こうした読まれ方に、「面白様」を見ることが出来るかもしれない。「きりぎりす」は『古今集』では以下の如く六首詠まれている。

蟋蟀いたくななきそ秋の夜の長き思ひは我ぞまされる

（秋・一九六・としゆきの朝臣）

あき萩も色づきぬればきりぎりすわがねぬごとやよる
はかなしき

（秋・一九八・よみ人しらず）

我のみやあはれとおもはむきりぎりすなくゆふかけの
やまとなでしこ

（秋・二四四・素性法師）

もろともになきてとどめよ蜚秋のわかればをしくやは
あらぬ

（離別・三八五・ふぢはらのかねもち）

秋はきぬいまやまがきのきりぎりすよなよななかも風
のさむさに

（物名・四三二・よみ人しらず）

秋風にほころびぬらしふぢばかまつづりさせてふ蟋蟀
なく

（雑体・一〇二〇・在原むねやな）

これらは「きりぎりす」の鳴き声にわびしさを覚えてい
る。「わがためにくる秋にしもあらなくにむしのねきけば
まづぞかなしき」（古今・秋・一八六・よみ人しらず）の
如く虫の音に悲しみを誘発されるのである。そう見る時、
例歌の上句の「あなかも夜半のきりぎりす」とは『古今
集』一九六の「蟋蟀いたくななきそ」と同様、そのわびし
さに堪えかねて、鳴き声を「あなかも」と表現したとも考
えられる。即ち、この例歌は上句の悲哀的イメージに対し
て、下句では恋に胸おどらせる内容が詠まれて艶なるイ
メージを有するのである。

しかし、この例歌にあっては、そうした情趣的なものと

してこおろぎの声を感じているのではなく、逢瀬の夢を覚まさせるものとしての存在と解することも出来る。これは明らかに「きりぎりす」の声をさびしいものとする見方の否定であるとともに、下句の恋的イメージとは逆のものとして詠まれている。すなわち、どちらに解しても相反する二つの内容が歌われているのである。

(22)の例歌は待つ女の悲哀を歌った歌である。久保田淳氏は「風の音、雁の音、いずれも女の待つという持続した時の流れを中断し、もしかしてあの人では、と思わせる性質のものである」と言われている。又、石田吉貞氏は「是でもか是でもかといった嫌いは免れない⁽¹⁷⁾」と言われ、悲哀に悲哀を重ねた救いようのない嘆きをみておられる。どちらにしても、「待つ恋」の悲哀感という興趣は認められても、知巧的側面は認めがたい。それだけに窪田空穂氏は「幽玄味のあるものである」と言われるのであろう。

ところで、上句には男の訪問に対する諦めの気持ちが歌われている。深い嘆きがイメージされる。それに対し、下句を『八代集抄』が解くように雁に、「聊慰めたるに似たれど」と読むと、一首は嘆きと慰藉が歌われていることになる。又、「雁」に雁書の意味をもたせると、上句は人の訪問のないこと、下句はその逆に人の便りの存在をイメー

ジさせる。即ち、一首に相反する二つの内容が歌われているのである。

その他、こうした例をとりあげると

(23) 岩間とぢし氷もけさはとけそめて苔の下水みちもと
むらむ 西行法師

(24) 見せばやな志賀の辛崎ふもとなる長柄の山の春のけ
しきを 慈円

(25) をぎ、ふくしづがまるやの檣の戸を明がたになくほ
ととぎすかな 後徳大寺左大臣

(26) 玉かしはしげりにけりな五月雨に葉守の神のしめは
ふるまで 基俊

(23)の例歌の「岩間とぢし氷」とは、窪田空穂氏が言われるように「最もさみしい、身にしみる感のする」表現である。しかし、その氷も立春によつて溶け出すという春の到来の喜びを「けさはとけそめて」以下の句で歌っている。

この例歌は暗と明との二つの相反するイメージを有する内容が詠まれているのである。もしくは、上句は氷が溶けるように春の喜びをゆつたりと歌い出したと見る時、下句の「みちもとむらむ」とは「人生の道」を求むという暗喩となり、ここに苦悩のイメージが理解される。やはり、相反する二つの感情内容を有す歌だと思われる。

(24)の例歌の「志賀の辛崎ふもとなる」という詞続きからは、「志賀の辛崎のふもとにある」と理解される。それは、自然な詠まれ方であるとともに、「あまの原ふりさけ見ればかすがなるみかさの山にいでし月かも」(古今・羈旅・四〇六・安倍仲鷹)、「なにはなるながらのはしもつくるなり今はわが身をなにとへむ」(古今・雑体・一〇五一・伊勢)、「人ごとにしたのみがたさはなにはなるあしのうらばのうらみつべしな」(後撰・恋・九四三・よみ人しらず)という歌があるからである。ところが、この例歌においては「志賀の辛崎ふもとなる長柄の山」と続くことにより、逆に、「志賀の辛崎が長柄山のふもとにある」という意に逆転される。上句によってイメージされる内容が、下句によってくつがえされるのである。そして、それぞれを作者は見せたいものだと歌っているのである。⁽¹⁸⁾

(25)の例歌について、「ほととぎす」は古歌においても様々に詠まれているが、明け方に鳴く「ほととぎす」は、「夏の夜のふすかとすれば郭公なくひとこゑにあくるしのため」(古今・夏・一五六・きのつらゆき)、「くるるかとお見ればあけぬるなつのよをあかずとやなく山郭公」(古今・夏・一五七・みぶのただみね)に見えるように、夜明けの明るさからくるためか、生き生きとした詠まれ方がな

されている。それに対し、この例歌の上句は山家のわびずまいのイメージが形象されている。正反対の情調が詠まれている一首だと思われる。

(26)の例歌は上句で繁茂した玉柏を歌い、下句ではそれを比喩的に語っている。草木の繁茂は「おほあらしもりのした草しげりあひて深くも夏のなりにけるかな」(拾遺・秋・一三六・ただみね)、「うき草のうへはしげれるふちなれや深き心をしる人のなき」(古今・恋・五三八・読人しらず)と詠まれてもいるように、その季節感を歌うか、もしくは、繁茂によりものが見えないことを歌うのが一般的だと思われる。即ち、この例歌においても上句の表現からはそうした内容が想起される。しかし、この例歌は繁茂する姿を比喩的に詠み、「何かが見えない」のではなく、「しめ縄をはっている」と逆に可視的に詠んでいる。上句のイメージが下句によって逆転されるとともに、それぞれが調和をもって一首を形成しているのである。

四

(27)うき身(こゝには「新古今」)かは山田のおしねおしこめて世をひたすらに
恨みわびぬる

(28)今日も又かくやいぶきのさしも草(こゝらは「新古今」)さらに我のみもえ
俊頼

やわたらむ

和泉式部

(29) あげがたきふたみの浦による波の袖のみぬれて沖つ
嶋守〔島人〕新古今 実方

(30) 数ならばかからましやは世の中のいとかなしきはし
づのをだまき 参議〔仁〕新古今 篁

(31) さくらあさのをふの浦波立ちかへり見れどもあかぬ
山なしの花 俊頼〔す〕新古今

(32) あられふるかたののみののかり衣ぬれぬ宿かす人し
なければ 長能

これらの例歌は各注釈書において、序詞、掛詞、縁語等の表現技巧について指摘されている。紙幅の関係もあり一つ一つの説明は各注釈書に譲ることにするが、より本質的なことはこうした技巧が目立っているのではないことである。武田元治氏が前掲論文において考察された内容を有しているのである。即ち、技巧性は一首の情調を深めたり、強めたり、生かすために用いられているのであって、技巧自体が目的ではないのである。それだけに、古今的技巧の中世化というものが認められると思う。又、他の体の例歌にこうした技巧を有す歌は、わずかな例歌を数えるのを見ると、「面白様」の属性として、序詞、掛詞、縁語などの表現技巧が考えられるのである。

五

「面白様」は一般的には、一首全体の上での趣向の巧みな歌と考えられている。以上の考察においても、趣向の巧みな歌は認められた。ところが一方、(29)の歌に対して、宣長は「詞めでたし」とは言うものの、「させるふしもなきうたなり」と記し、又、久保田淳氏は(24)の歌に対して「単に春景によせた雑歌である」と言われているような趣向の認めがたい歌が存在するのである。加えて、古今的着想の巧みな歌を言うなら「年のうちに春は来にけり一とせをこそとやいはむ今年とやいはむ」(麗様)の歌は「面白様」とされるべきだろうと思う。着想、構想、趣向の巧みさを否定するものではないが、必ずしもこれらが「面白様」の本質を規定するとは思われない。

感興を催すという歌を、その内容を調べることによって、その本質は

一、本意の否定、その逆を歌うことによって興を感じ

二、表現の背後に真実の感動がこめられていることを解し、興を感じる。

三、二つの相反する内容が歌われていることによって

興を感じる。

四、表現技巧がこらされていることによって興を感じ
る。

という四つの内容に分類出来た。一と三とは似ている点もあるが、一は本意、詞のイメージを否定するのに対し、三は否定にねらいがあるのでなく、むしろ、相反するものの調和がはかられている一首なのである。二は表現の背後とは言っても、その中心的抒情が余情的に解されるのではなく、内容や詞続きの上から、逆接的表現、屈接した表現であることによって理解されるのである。又、一における本意の否定も、意味のない否定のための否定ではなく、その否定によって本意のもつ真実とは逆の真実があることを明かしているのである。

こうした和歌の常識をくつがえす詠み方、表現の裏に感動をこめる詠み方、分裂する危険をはらみながらも、相反する異質なものを調和させている詠み方による、断絶、落差、意外性、大胆性に感興を催すものと思われる。こうした感興が新奇な、奇抜な、斬新なものからではなく、和歌の常識、伝統に対する否定及び逆説から来している点に、「面白様」の本質があるものと思う。そして、「面白様」の技巧性はむしろ、伝統的なものであり、『和歌体十種』の

「両方致思⁽²¹⁾体」を受け継ぐものであろう。

以上、考察した四つの性質は、それぞれ互いに関連するものもあり、一つ一つ考察しなかったが、次のように分類出来る。

一 本意の否定	1
二 表現の裏	11
三 相反する内容	12
四 技巧性	13
	14
	15
	16
	7
	8
	9
	10
	17
	24
	25
	26
	31
	32

註

- (1) その経過については、福田秀一著『中世和歌史の研究』（角川書店 昭和四七年刊）に詳しいので、同書に譲る。
- (2) 「和歌十体の位置」（『和歌文学研究』第五十五号）
- (3) 佐々木信綱氏（『日本歌学史』）、久松潜一氏（『日本文学評論史 古代・中世篇』）、谷山茂氏（『幽玄の研究』）、太田水穂氏（『日本和歌史論 中世篇』）、実方清氏（『日本歌論の世界』）、『和歌文学大辞典』（明治書院）、『和歌辞典』（桜楓社）
- (4) 『有心と幽玄』（笠間書院 昭和六〇年刊 一三〇頁）、『有心』昭和一九年刊
- (5) 『和歌十体論研究』（弘文堂 昭和三二年刊 二二四頁、二三四頁）

- (6) 『面白様』考——定家十体の内——(『大妻女子大学文学部紀要 第十六号』)
- (7) 『完本 新古今和歌集評釈』(東京堂・昭和三九年刊)以下この書による。
- (8) 『新古今和歌集全評釈』(講談社 昭和五十一年刊)以下この書による。
- (9) 「うきよをもまたたれにはなぐさめんおもひしらずもとはぬきみかな」(『後拾遺』恋・七四六・和泉式部)では、恋の憂世を慰めるために友を求める。又、西行には「さびしさにたへたる人のまたもあれなほりならむ冬のやま里」(『新古今』冬・六二七・西行法師)という歌がある。
- (10) 「よをすててやどをいでにしみなれどもなほこひしきはむかしなりけり」(『後拾遺』雑・一〇二九・前中納言顕基)という歌もある。
- (11) 『歌枕歌』ことば辞典(角川書店 昭和五八年刊)
- (12) 前掲書において久保田淳氏は次のように説明されている。「都で見た月を『数にもあらぬすさびなりけり』と断じた時、彼の裡には自らの境涯への肯定や、真の月のあわれさに触れえたという自負があったと思われる。それは、都の歌人にとつてはコンプレックスとなつてはね返つてこなかつたであらうか。」
- (13) 窪田空穂氏は前掲書において「思い出すということは、忘れるということと相對する心である」と説明されている。
- (14) 大田水穂氏は前掲書において、「とはれにけり」が「一

興になり」と言われている。

- (15) 『新古今和歌集詳解』(明治書院 大正一四年刊)
- (16) 註7に同じ。
- (17) 『新古今和歌集全註解』(有精堂 昭和三五年刊)
- (18) 窪田空穂氏は「見せたいものだなア、この山から見える志賀の唐崎と、この山のふもとにある長柄の山の春の景色とを」と言われている。上句の伝統的詠法による読み方が下句によつてくつがえされる点において、一で考察した部類にも大いに関係している。
- (19) 「風ふけばよそになるみのかたおもひ思はぬ浪になく千鳥かな」(幽玄様)、「瀬をはやみ岩にせかるる瀧川のわれてもすゑにあはむとぞ思ふ」(有一節様)、「わが恋はちぎの片そぎかたのみ行きあはで年のつもりぬるかな」(有一節様)など一七・一%の割合である。
- (20) 『美濃の家裏』
- (21) 小沢正夫著『古代歌学の形成』(塙書房 昭和三八年刊)二五四頁参照。
- 〔付記〕テキストとして『定家十体』は『日本歌学大系 第四卷』、歌集は『新編国歌大観 第一卷・第二卷』を用いた。

(本学講師)